

# 國學院大學學術情報リポジトリ

シンポジウム討議記録：令和元年度  
國學院大學人間開発学会第十一回大会  
シンポジウム報告：「人間開発」の再検討：  
その原点と将来を見据えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 大誠, 渡邊, 雅俊, 林, 貢一郎, 山瀬, 範子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001408">https://doi.org/10.57529/00001408</a>

## 〔シンポジウム討議記録〕

### 登壇者

渡邊雅俊（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

林貢一郎（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

山瀬範子（國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）

### 司会

藤田大誠（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

藤田 お三方の先生に御無理を申し上げまして、短い時間で報告をまとめていただきました。

本シンポジウムの趣旨については初めにお話ししましたが、初めてこの話を聞いて、いきなり前提なしに聞いておられる方もいると思うので、その点について簡単に補足するため、まずは私からお配りした「参考資料 國學院大學の建学の精神」「神道精神」と「人間開発」に基づき申し上げたいと思います。

### 國學院大學の建学の精神「神道精神」

藤田 根本的な前提となるのは、國學院大學の建学の精神になります。建学の精神は、実は國學院大學の中でも、どの程度本当に理解、意識しておられるか分からないというふうに私は思っておりますが、その原点となるのは明治十五年（一八八二）という非常に昔の話になります。まずはこの年に皇典講究所という國學院の母体ができます。この組織を経営母体にして、八年後の明治二十三年（一九九〇）に「國學院」という高等教育

機関ができます（大正九年（一九二〇）には大学令大学による私立大学としての「國學院大學」が成立）。

その皇典講究所ができたときに、同所の総裁宮である有栖川宮職仁親王により「告諭」が示されました。大学ウェブサイトなどではこの「告諭」にある文言「本ヲ立ツル」が建学の精神だと記しますが、それだけでは意味が分からないので、何の「本ヲ立ツル」のかと言うと、「告諭」に「国体ヲ講明」と記されているように、これは日本の「国柄」とそこに住む人々の根本のことを指します。「告諭」では、大きく「国柄」を明らかにするとともに、個々の道徳性を踏まえた「人柄」を養成していくという本学の目的を創立時の一番初めに宣言しているのです。

なお、この「告諭」では「神道」とは言っていないわけですが、創立当時の明治十年代半ばにおいて「神道」という言葉は、専らいわゆる「宗派神道」（教派神道）と言う宗教的な神道のことを指し、神社（神社神道）については、殆ど「神道」という言い方はしておりませんでした。戦前の本学では、建学の精神としての「国体の講明」「道義の発揚」「惟神の大道（神道）の宣揚」という言い方をしておりましたが、戦後になると、「國學院大學学則」に「神道精神」という表現で明確に示しております。國學院大學の「研究教育に関する指針」においても、「建学の精神である「神道精神」とはつきり書いてありますので、本学の建学の精神は「神道精神」ということになりました。

その「神道精神」は、「宗教教団」としてのキリスト教や仏教のようなイメージで捉えるよりもっと素朴なものといえますが、やはりある一定の方向性を持つものであるということですが、本学創立百二十周年の際に、「神道精神」というのは「日本人

としての主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神」であると全学的に確認されました。日本人や日本としての主体性、つまり自分を持つている、これをしっかりと持ちつつも、さまざまな外からの刺激、それは学問、さらには新しいもの、それを受け入れる度量がある寛容性、さらには、私などからは全く窺えないと思いますが、謙虚さというような奥ゆかしい、そういった面を持つべきであるというような精神というふうにとまどております。これは全学的に一応、共通理解を得られております。

もう一つ、大学名である「國學院」。これは学生によく言うのですが、青山学院や関東学院、関西学院のような地名や地域名を冠するものではなくて、学問名称が付いているということですが、「国学」というのは、これも一口では言い難いのですが、単なる国文学、日本の文学や歴史、或いは法律を学ぶというだけではないものです。これは、國學院という学校ができた際に、核となるものは「国史・国文・国法」であるが、それを踏まえつつも、「海外百科の学」、つまり、外国の新しい学問というものもしつかりと学ばなければ、日本のことは分からない旨が示されました。つまり、比較ができなければ自らのことは分からないわけですから、その意味で、非常に幅広いものの捉え方をしなければ「国学」にはならないというのは、「國學院」設立当初から「國學院設立趣意書」において謳っているわけです。

日本の根幹を究明する総合的な学問というのは、國學院大学では今、その将来像として「人文・社会科学系の標となる」という言い方をしていますが、つまりいわゆる文系に近いイメージなのですが、一概にそうは言えなくて、人間開発学部の先生方には、自然科学的な研究をしておられる先生方が非常に多く

いらつしゃいますが、もちろんそういったアプローチも入ってきます。そういうことから、はっきり言って、文系とか理系とか、あまり分ける意味を私は感じておりませんが、本来、國學院の国学は、そういった意味というものを取つ払う、そういう広い概念ということになります。つまりは、核を押さえた上で、いくらでも幅広く拡大できるというような内容を持ちます。

また、実は國學院大学の校歌の歌詞（芳賀矢一作詞）に建学の精神や学問の基盤である「国学」については盛り込まれているので、改めて御覧いただきたいと思えます。

#### 「人間開発」理念の系譜を考える

藤田 今回の議論において大きな論点は、「人間開発」という理念です。その「人間」観や「人間」像というものが、これも唯一の解釈があるわけではないのですが、議論の口火を切るため、さらには言葉の観点からある程度の共通理解を得るために考えてみると、やはり、その原点について、日本最古の古典から取ってみるのも一つのやり方であろうかと思えます。

例えば、「稽古照今」（古を稽へて、今に照らして）というのは、『古事記』という日本最古の書物の序に出てきますが、こういった考え方や、或いは国生み神話のところを出てくる「修理固成」（おさめつくりかためなせ）というような言葉があります。こういう言葉を使っても別段、一つの宗教の信仰的立場を示しているというよりは、かなり独自でありながら普遍的な意味合いをも持つ、そういった考え方になろうかと思えます。かかる日本最古の古典から典拠を取ることによっても、日本における人間観、

主体性や積極性や総合性、歴史性や寛容性などが窺えるのであり、これらを以て日本発の人間観、人間像が見出せるのではないかと、という個人的な思いがあります。

人間開発学部は、國學院大學という創立百四十年近い学校において、十年ほど前に創られた最も新しい学部になります。その際に「人間」と「開発」を結び、「人間開発」という言葉を付けて、日本で唯一の名称を持つ学部として存在しております。

「開発」については、英語で考えようと、「development」ですから、ここからは「発達」とか「発展」、「発育」という意味も出てきますが、本学部はそういったところから発想したというよりは、個々の人間の能力、閉ざされた、或いは潜在的な能力を「開発」する、「開く」(拓く)というイメージがあります。

これは今まであまりやってこなかったのですが、漢字の熟語としての「開発」、これについては、もともとは「かいほつ」と言ったりしましたが、元来は新田の開発から使用された語で、経済・社会両面の開発の意を含むものでした。次第に開き始めること、具体的には産業や新技術の実用化、知識を開き導くことや潜在能力を自発的に引き出し伸ばすことの意へと拡大しました。明治時代には、これは西洋から導入された概念ですが、ペスタロッチなどが唱えたいわゆる「直観教授」、「実物教授」などとも言いますが、その際にも「開発教授」という言葉を使っております。これは漢字の熟語「開発」を使っているのです、こういったものもヒントになってくるはずなのですが、これまで本学部ではそういった議論が殆どなかったように思います。

また、海外から「human development」の翻訳語として導入された「人間開発」という概念についても、「国連開発計画」

(UNDP) のところで「人々の選択肢を拡大すること」という意味合いで使われておりますから、そういった面なども踏まえて、まず、「人間開発」という言葉、そういったものの系譜も含めまして、ぜひ議論を広げていただきたいと思っています。

### 現代国学としての人間開発学

藤田 先に私の考えを簡単に言っておきますと、「現代国学としての人間開発学」という考え方になります。

「国学」というのは、そういった意味合いで捉えることができるという思いがあります。江戸時代の国学者は研究をしつかりと行いつつ、弟子を育て、しかも、幼児教育から初等教育に関する議論も行っているし、地域の手習所(手習塾)、いわゆる寺子屋の師匠などもやっている。そういった形で人を育てる実践をしているわけです。それを現代においてもやっていくというのが国学の一つの在り方だと私は思っています。但し、健康体育学科の中で問題になったように、それを「指導者」という言葉で括るのか、より広い概念や言葉を生み出すことができるのかというようなことも含めて議論いただければと思います。

今日のシンポジウムにおいては、國學院大學の建学の精神、人間開発学部の理念、それぞれの学科の特色、さらには現状、それから将来に向けてということまで話をしていきたいと思っています。少し前置きが長くなりましたが、あまり細かい議論になつていくと困りますので、三つの報告と今の話しの流れを踏まえ、その辺りを少しお考えいただきつつ、フロアから御意見、或いは御質問を頂戴できればと思います。



### 親学問としての「人間開発学」と三学科との関係如何

田沼茂紀（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授） 本日のシンポジウムのテーマを、本当に意味深く感じております。

私は、國學院大學人間開発学会第一回大会シンポジウムの発題者、それから、昨年までの國學院大學人間開発学会の会長という立場で、本日のシンポジウムについて少しお話をさせていただきたいと思っております。私見と、それから、三人の報告者の皆さんに質問をさせていただきたいと思っております。

まず私見を述べますと、「人間開発学部」という学部にも所属して十一年目になるわけですが、やはり、ずっと感じておりましたのは座り心地の悪さなのです。自分自身、社会科学の人間として座り心地の悪さをずっと感じながら、今日に至っております。そして、その十一年の間に途中から参集されました皆さんはなおさら、もしかしたら、何なのだろうかと、自分自身で解決できないような不可解な部分を抱えられているのではないかと、そんなことを思っている次第です。

私は、「人間開発」と掛けて、糸の伸びきった凧と解きたいのです。糸が伸びきって大空に舞っているのですが、くるくると、とめどもなく、あちこちに行きながら漂っている凧をイメージするのですが、その辺は何なのかということを考えていきますと、「人間開発学」のデイシプリンと言いますか、学問的なよりどころはどこなんだ、そこが、私自身でなかなか見い出せてこれなかった部分だった、と、思っているのです。そんなことで、なぜそんなことを思うのか、ということ順番に話してい

きたいと思いません。

まず、親学問。「人間開発学に親学問」があるとすれば、それは何なのだということになるわけですが、その点に关しましては藤田先生が今、縷々述べて下さったように、神道学とか国学、本学の建学の精神、それは揺るぎのないところかと思うのです。では、その神道学、国学の中にぶら下がったところの人間開発学部の各学科は、どうなのかということなのです。

それぞれ、全く異なる学科がぶら下がっているのが人間開発学部です。やはり、三学科に共通しているのは、ビジネスパーソンをどう育むかというところになるかと思うのです。これは健康体育学科だけの問題ではなくて、保育者養成、或いはスポーツ指導者養成、或いは学校教員養成というような部分で考えていきますと、その中で実際の日々の、人間開発学部の取り組みとして考えていきますと、どうしても「実学的」にならないを得ないのです。実学ベースで考えていったときに、では、神道学とか国学はどうつながってくるのだ、その部分の乖離というものが大きな問題なのだろうと私は思う。

その乖離を一年、二年と重ねてきますと、最初はある程度の範疇で収まったのです。今日のレジユメで示された範疇（下段に掲載した「人間開発学部の目的」「人間力」の育成）を图示化したもの）で何とか、この中に押し込めてきたわけです。

先ほど、林先生のお話がありました、「人間開発」という部分についての達成度は三〇パーセントぐらいですか。研究の世界という「エフォート」（実質的な全仕事時間）も問題なわけですから、では人間開発学に振り向けたエフォートは何パーセント、五パーセント程度か、とも私は思ったりするわけです。

## 人間開発学部の目的＝「人間力」の育成



## 実学と理念の中敷きとしての人材育成モデルの必要性

**田沼** そんなことを考えていきますと、やはり、理論と実践との乖離をどう埋めていくのか。これを考えていけない限り、この後、この学部の存在価値そのものが揺るぎかねないと思います。理念を具現化するのか、それとも、ただ量的な拡大を図っていくのか、バブルを続けていくのか。この辺の、そろそろ見極めをする段階に差し掛かっているという印象を持ったのです。

やはり、「中敷き」が必要なのだと思います。三学科は実学なので、実学と理念の間に挟む、サンドイッチする共有の人材育成モデルと言いますか、そういうものを作って、先の図示化されたものに差し替えていけないといけない。最初から感じていたのですが、それも何とかできるのだろうと私自身も努力はしてきたわけなのですが、あまりにも理想と現実の間が開き過ぎていきます。これを少し、プロジェクトを立ち上げて検討していくような、共有の人材育成モデルを考えていくようなことをしていけないと、次の二十年に向けて何ができるのか、たいへん難しい問題が起ころうと思うのです。

もしかしたら、横を意識しない、縦割りであらうと、蝸壺になっているのではないかと、この懸念しているわけなのです。今日、各学科で御報告いただいた皆さん、そのような共有の人材育成モデルみたいなものが、必要かどうか、こんなことをどんなふうにかえておられるのか、正直なところではないのですが、お話しいただきたいということが質問でございます。

**藤田** ありがとうございます。結構大きな質問ですが、報告者のお三方、簡潔で結構ですからリプライをお願い致します。

## 三学科共通の人材像は構築できるか

**渡邊** 田沼先生、ありがとうございます。三学科で共通する人材像というのは、正直言うところ全く考えていないです。ですから今、お話しくださったことは本当に、非常に示唆に富むというか、視野をもっと広げて、こういった問題に取り組んでいかないといけないということをお願いしたいと思います。

ただ、初等教育学科としては教育養成、教育者ですから、子ども支援学科も健康体育学科も教員を養成する部分というのはありますので、そういった点では他の二つの学科と連携して、共通する教育者、教員像というのは検討していかなければいけないというふうに改めて思いました。

**林** ありがとうございます。まず、実学と親学問とのギャップということなのですが、多分、健康体育学科で教員をやっている人間の殆どは親学問が国学とか人間開発学と思ってるやっつけないと思うので、その間のギャップについては、今のところ、僕自身は考えたことがなくて、健康体育学科の授業の中でも、すごく実学寄りの学問もありますし、もう少し根本的な部分の学問もあります。そういった視点で見えていなかったもので、國學院大學人間開発学部の中に位置付けられた健康体育学科として学生に伝えることを考えていかないといけないのかな、というふうには思いました。あまり返事になっていませんが。

それから、理念と実学の「中敷き」となる三学科で共通する人材像のようなものも正直、渡邊先生と一緒に考えてはいなかったのですが、ただ、一年生の必修科目である「人間開発基礎論」のようなものがちゃんと機能しているのであれば、そこで共通の、この学部はこういう学部で、こういう人を育てていきたいのですよということが、一年生の最初ときに、学生にとっては腑に落ちるといふか、納得できるようなものになるのではないか。逆に言うと、授業で教えるのであれば、それが唯一のチャンスではないかというふうに思っています。全学科一緒に授業することはないので、それぞれの学科の特徴になるといいのかなと思います。だから、もしそういう共通のものがなくて、本学部は他の学部とは違って、こういう人になって欲しいという何かが必要なのであれば、そういう取り組み、そういう授業でしか縛れないのかなというふうに思っています。

山瀬 御質問ありがとうございます。子ども支援学科でも三学科に共通する人材像ということは、話題に上がっていないところですか。子ども支援学科は、初等教育学科や健康体育学科に比べて、学部創設から四年経ったところの五年目にスタートしました。今年度の卒業生の殆どは平成二十八年度入学ですが、初めて四年生まで全部揃った年の学生たちになります。

ものすごく私的な見解なのですが、子ども支援学科一学期のとき、本当にいろんな、外に出掛けるときも、学校の中の行事も、いろんな所に一緒に行って話をしていた頃、彼ら彼女らが「自分たちは子ども支援だから」と言っていたことからすると、今の四年生が「私たち、子ども支援だから」という言葉は、随

分自信が湧いてきたように感ぜられます。学科設置当初ももちろん頑張ってくれていたのですが、どこか初等教育学科と健康体育学科を意識しながら「子ども支援らしさ」と言っていたのが、今の学生たちが、「私たち、子ども支援だから」という話をしてくれるときには随分、自分たちのアイデンティティーとして「子ども支援らしさ」ができていて、息づいてきてくれている。さらに、今の三年生と一緒に話をしたりすると、その「子ども支援らしさ」もこれから後に続く学生たちに伝えていきたいということ話を話すようになってきて、一学生たちが、「私たちが何だろう」と一緒に模索してきたものが形になり始めたところなのかなと思います。

具体的にそれが何かと言われると表現するのは難しいのですが、こういったことを、自信を持って話せるようになってきている学生たちの姿を見ていると、さきほどの藤田先生のお話にもあった國學院の視点、自分を持ちつつ外のことを見ていくというところにもつながるように思います。私たちの学科である子ども支援学科が他者を観つつ出来上がり始めたところで見ると、この自分とは何かというところを、学生たちのみならず私たち教員側の方でも深めることによって、三学科の共通するところ、先に挙げられた議論に進める基盤ができるのではないかと、先にお話を伺っていて感じました。

#### 「人間開発基礎論」で何を語るか

田沼 ありがとうございます。やはり、どうしても学科という単位の中における人材育成という視点に行きがちなのだと

いうことは印象として持ちました。それで今、話が出ましたが、人間開発学部にとって、人間開発学部の学生たちにとって一番重要なのは「人間開発基礎論」であり、この一番ベースになる部分の科目というものがたいへん重要なのだと思います。

この「人間開発基礎論」、おおむね評判があまりよくない。普通の授業と同じではないか、という学生たちの声を聞くわけです。ところが、それを御担当されている先生方は、「人間開発」の思いを学生たちに的確に伝えようといへん努力なさっているわけです。それがなぜ伝わらないのか。もしかしたら、科目運営の方針が少し違っているのか、あるいはオムニバスでやっているため、その辺の擦り合わせの部分というのが不十分なのか、もしかしたら共有する共通項がないのかもしれない。

そんなところを、御担当されている方も本当に御苦労なさっていると思うので、ぜひ声を聞きたいと思う次第です。これをやらない限り、「人間開発」云々など、こんな場で議論したって全く改善されないということを申し上げたいと思います。

**藤田** 核心的な話になってきましたが、時間が無くなってきましたので、もう閉じる方向に行かなければ、時間がとても足りません。もし、御意見や御質問があれば、ここで一度にお受けしたいと思います。どうでしょうか。

**柴田保之（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）** 私は「人間開発学基礎論」担当者の一人ですから、これを言わないと完結しないので、もつともちゃんと答えられないのですが、一年生が入学してすぐ、冒頭にやらせていただくのは結構、

気持ちのいいもので、「人間開発」とは何かと、僕が言えるわけです。学生に対して、「人間」と「開発」の間に何が入るか。ここに入るのには「可能性」ですと僕は言っています。「development」が「発達」と訳されるか、「開発」と訳されるかによって違いがあって、「発達」と訳されてきた方は決まった道筋をたどるイメージになります。「開発」と訳されると、それは一つのものが多方向に開いていくイメージになると思うので、とにかく決められた道を歩くのではなくて、多様な可能性が一人の中から開かれていくという意味だというふうには、学生には最初に言っています。僕は、「人間開発」という言葉が、すごく新しいことを言わなければいけないのではなくて、今まで「教育」と言われていたものを「人間開発」と言うことによって、ここに重点を置くかを示すことができるのか、というニュアンスで考えていて、それは健康体育学科でもそうですし、子ども支援学科でもそうなのですが、一応、自分が言う「可能性の開発」という観点で「教育」のことは見てみると、まず、今までは「教育」という言い方では、教えることだけになることが多く、学生がこれから自分自身の可能性をどう開いていくのかということらまでは届かないのですが、「人間開発」ということは、そのまま学生が自分の可能性をどう「開発」して教師になっていくかということに届く言葉なのです。

もう一つは、「教育」そのものを「人間開発」と言っているの、児童・生徒をどう育てるかというのも「人間開発」と言っているわけなので、それは今までの「教育」に当たるのですが、今までの「教育」が手垢の付いた概念なので、「人間開発」と言うことによって、例えば、これはいろいろなところ

に書かれています。まだ可能性が開ききつていないでいる、そういう子どもたちの可能性を開こうということが強調されるのです。

だから、「人間開発」と言うことによって、それまで、どうしても今までの学問の枠だと重点を置ききれなかった部分に、重点をきちんと置ききれているというイメージがあります。

多分、健康体育学科だったら、あんまり運動ができない僕みたいな人間もちゃんと視野に入れて、その人が、それでも持っている可能性を開発するというふうには、この言葉を使えば視野に入ってくるので、すでにそういう取り組みはされていますし、子ども支援学科にとっては、実は保育の世界というのは、可能性が開かれるということではもつと「人間開発」に近い世界なので、そんなにずれるはないと思うのです。そういう部分に関わっているということでは、「人間開発」という言葉によって、他の大学では無かった、或いは旧来の名称ではイメージしきれなかった部分に光が当たっているというふうには自分は捉えています。

### 「人間開発」と各学科専門科学との往還的關係の必要性

成田信子（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授、同学部長、國學院大學人間開発学会長） 渡邊先生が最後に触れられた「人間開発の基礎理論としての教育学の探求」というところに対して、質問というか、ちょっと考えてみたいことがあります。「人間開発」というのは、非常に大きな理念だということに思うのですが、それが下支えするものというか、「教育学」

がその基礎理論というふうになると、私は両方を照らし返す形で捉えたいと思います。もともと「人間開発学」というのがないから、今みんなで話しているのだが、「人間開発」の理念で見て「教育学」を見る、逆に「教育学」から見ると「人間開発」はどう位置付けられ、見えるのかという、そういうふうに見たいな、ということが今日教えてもらったことです。

健康体育学科の先生たちにぜひ伺いたいのは、「教育学」と渡邊先生が言っているところを、言葉の使い方は分からないですが、例えば「人間開発の基礎理論としてのスポーツ科学」というふうに言えるのか、「スポーツ科学」が「人間開発」を照らし返し、「人間開発」から見ると「スポーツ科学」がどう見えるのかという、そういうふうには位置付けられるかどうかということが聞きたいです。

それと今、柴田先生が仰ったことにつながりますが、「保育学」と言ったときに、「人間開発」との關係が取れるかどうかということが非常に大きいというふうには思うのです。要は「人間開発」を、それぞれの学科の専門科学との關係で見ると、どう見えるかというのを、もし御意見があったら伺いたいです。

### 「体育学」と「スポーツ科学」

一正孝（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授） 私も「人間開発基礎論」を担当させていただいているので、意見を申し上げます。今の成田先生の質問とも関連があると思います。

柴田先生が先ほどお話しして下さったのですが、最初「人間開発基礎論」は新富康史先生がお一人でなされていたのです。

学部が一回りした後、各学科の三人でやっていこうということになったのですが、私自身の反省も踏まえ、そのときの術というのが十分ではなかったのではないかと思っております。

また、当初「人間開発基礎論」は新富先生が担当なさっていた「人間開発基礎論Ⅰ（人間力育成の人間学）」とは別に「人間開発基礎論Ⅱ（ヒトのしくみとはたらき）」という科目もあつたのです。Ⅱの方は、どちらかというとな生理学的な自然科学的視点でやっていた。それが、Ⅱの方は少し影が薄くなり、Ⅰの方が色濃くなって、そこで多分、三学科の教員がやろうということになったと私自身はそういう受け止め方をしております。

私は、人間開発学部として専門教育科目を立ち上げる前は渋谷キャンパスの方で教養教育科目（教養体育）をやっていました。「教養」というと人間の教育そのものなのです。ですから、私が「人間開発基礎論」で気を付けておりますのは文理融合です。離れる方ではなくて、文理融合というのは、Ⅱの方が少し薄くなっておりますので、身体的な視点で文理融合的な考え方をもとに講義はさせていただいているということです。

どうということかという、スポーツ科学、或いは教育科学とというときに、従来私たちは、「教育学」の中に「体育学」というのがあるということやをずっと言われてきた。しかし、私たちスポーツとか体育の分野の中では、それでははみ出してしまふのです。「教育」の中に無理に「体育」というのを押し込めてきていた歴史があるのです。

それでは今の健康体育学科は実質的に対応できない。そこに一つの課題がありまして、私なんか「教養」から来た人間ですが、特に新しい専門性を持った先生方に見られるように、スポー

ツ科学にもいろんな分野があるのです。関連学会で四十ぐらいあります。日本体育学会の専門領域としては十五になります。しかし現在、「体育」という言葉で収まらないので、「体育」という言葉が「スポーツ」に変わっているのです。

人間開発学部設置の際も、当初は「健康教育学科」の名称で申請する予定でしたが、文部科学省からはそれでは駄目だ、それだったらカリキュラムを変えて下さいと言われました。もし、そのネーミングを変えないのだったらカリキュラムを変え、カリキュラムがそのままだったら「健康体育」とか「健康スポーツ」にして下さいと言われたときに、時間的にもなかったものから、結局「健康体育学科」という名称になった。

本場に「体育」という言葉自体が文科省のいいように、いろんな学者のいいように使われてきた日本の歴史があります。しかし今、非常に大雑把な言い方なのですが、私たちは「スポーツ科学」という中に、いろんな人文・社会・自然諸科学の分野が含まれているというのが多分、基本的な考えではないか。そういう背景がある中で、先ほど、林先生がいろいろ苦労をされながら発表して下さったのですが、そういう問題点があるという事は共有していただければ有難いと思っております。

ですから、これは「人間開発基礎論Ⅰ」だけの問題ではなく、この学部、各学科としての議論が足りない中で今まで来ているので、ぜひそれは今後、詰めていただければ有難いと思います。

### 再び、「人間開発学」の構築に向けて

藤田 ありがとうございます。それでは、最後に御登壇のお三

方から一言ずついただきましょうか。

渡邊 今日、こういう発表の機会をいただきまして、ありがとうございます。初等教育学科という学科に所属していますが、「人間開発学部」や「人間開発学」について、しっかりと考える経験をいただいたことによって、また、改めてこれからどうやって教育、研究を進めていこうか、自分の振り返りになったと思います。

先ほど、成田先生から教育学科に関するお話をいただいたのですが、僕は、「人間開発学」の基礎としては、われわれの「教育学」や「体育科学」、そして「発達科学」というふうに考えていて、われわれが科学的に探究したことを授業でどのように活かしていくかということが教員個々に求められていくのが、これからの十年間ではないかというふうに気付きました。

林 ありがとうございます。自分の中でも、ちょっと頭が整理されたような気がします。成田先生に先ほどいただいた、「スポーツ科学」から「人間開発学」にどのようにつながるかという質問なのですが、もちろんここが一番難しいというか、悩ましいところですね。「スポーツ科学」の中にもいろいろありまして、すごく実学、例えば、ボールはどうやったらかよく投げられるか、とかいうような研究をされている人の場合には当然、教育的なところに結び付けて考える、スポーツ科学から人間開発学のような人を成長させる方向に行く部分もありますが、それが対人ということであれば、そういう学問分野もスポーツ科学の中にはあります。

ただ、例えば、スポーツ社会学などの学問分野もありますので、その場合は、一生懸命勉強したからといって、直接的な対人というわけではなく、広い意味で言う人と人に伝わっていくものの、社会を変えたいというふうな視点でスポーツを見てみるという分野もありますので、そこに少しギャップがあります。ですから、「人間開発」というものが人の能力を引き出すものだけというふうには決まってしまうと合わないところが出てくるというのが、僕たちの視点です。

「教育」でやっている人だと絶対そこはつながってくるが、他にはそうではない人もいますので、そこで、いつも「体育はね」と言われるところです。ここが悩ましいところではあると思っています。ですから、「人間開発」の概念自体が人だけではなくて、人も含めて大きく「社会」だと言うのであれば、スポーツ科学が「人間開発」につながるっていきやすい、いける分野が増えるというふうに思っています。

山瀬 今日、先生方からいただいた御意見を基に、みんなで議論を深めていきたいと思えます。ありがとうございます。

藤田 もう終了時間がやってきました。私がいまだ喋っても仕方ないのですが、聊かまとめておきたいと思えます。

本シンポジウムでは、少し学問の話に集中したような気が致しますが、なかなか難しい点だと思えます。ただ、私から見ると、はっきり言って「国学」というのは、別に近代的ディシプリンではありません。一般的イメージとしては、文学やっている人だとか、歴史やっている人だとかと思っている人が大半か

もしませんが、いわゆる「国学者」という人たちはあらゆることを何でも知っていなければならぬ（少なくとも知るうとしなければならぬ）のであって、本来はそうでないといけない学問です。言葉を知らないといけない、外国語も知らないといけない、歴史も知らないといけない、法律も知らないといけない。しかも、人の社会生活、さらには、その仕組みであるとか、そういったことを総合的に学ぶというのが理想です。

ただ、その中でも得意分野があるということで、江戸時代でも歌の学問が得意な人がいれば、いわゆる国語学みたいなものが専門の人もいる。但し、それ以外にも、さまざまな得意分野がある中で「国学者」と言われてきた人々がいたわけで、別にそれにこだわるわけではないのですが、國學院大學の「国学」に照らせば、別に文学をやっている人が国学者だとか、人文系だとか、そういったことは、私は全く考えなくとも良いと思っています。例えば体育の分野であっても、明治十五年に始まったときから、逸早く「体操」を採り入れ、教育課程に組み込んでいた皇典講究所を源流とする國學院という学校の「体育」が、何も「国学」をベースにしているとは思いません。そういう意味で、「国学」とは別に文学だとかそういうことではなく、人の生き方の問題であって、その一つの歴史的な営みをベースにしているというだけの話だと、私は理解しています。

ですから、「国学」というのは到底近代的ディシプリンなどに収まるわけではない。ただ、総合的学問「国学」からは「国文学」とか「国語学」、「国史学」などの人文科学的な学問が分かれば、ドイツをはじめとするヨーロッパ諸学問の潮流と結び付いて近代的ディシプリンとして成立し、今に至っています。しか

し、他の大方の分野は、西洋から採り入れたものを日本的に移入し、日本における学問分野として成り立っていると思います。

そもそも総合的学問は近代的なディシプリンにこだわる必要がないと私は思っていて、成田先生が仰ったように、「人間開発学」といっても、卒業して得られる学位からすれば、「教育学」、「体育学」になります。それはそれぞれの学科で特に得意とする面であり、或いは特に注目してそこを中心に学んでいくということであって、われわれが目指す方向性というのは「人間開発学」と言っても、私はいいと思っっているのです。なかなかそういう言い方では通用しないと聞ければ、それまでですが、一口にサイエンスと言ってもいろんなものがあるわけですから、その流れを含めていきますと、もっと、これまでの学問体系をぶち破るような総合的学問があっても良いと思っています。もう少し言うと、日本における「国学」は西洋でいう「哲学」みたいなものかなと思います。そこをベースにしつつ、さまざまな個別の専門分野が出てきます。法学や医学などが出てきます。文学も出てきます。そのベースとなる何か、核となるもの、それを意識していますよ、という点において、斯様な学問は「人間開発学」と言ってもよいのかなという気は致します。

「国連開発計画」における「人間開発」概念においても、個々の選択肢を広げるということは社会構造そのものを改善していくということですから、「社会開発」そのものです。ですから、人間という個体一人一人は、個々のアトム化したものではないと私は思っている。今日のいろんな議論を踏まえ、ぜひ、まずはそういったことを採り上げて議論、話しをしていくということが大事なのではないかと勝手に思っております。

司会が不慣れで申し訳ありませんでした。シンポジウムはこれで終了とさせていただきます。ありがとうございました。